

びわこ・くさつキャンパスの魅力を探る！

1994年に開設されたBKCは、来春、開設10周年を迎えます。BKCでは、教育、研究、学生の課外自主活動などのあらゆる分野で先駆的な試みがなされ、立命館大学の発展の大きな原動力となっています。今回の特集では、日頃、学園の広報活動に協力している「学生広報スタッフ」の中から、衣笠キャンパスで学生生活を送っている学生を中心にキャンパス探検隊を結成しました。BKCで今輝いている人へのインタビューを通じて、BKCの魅力に迫りました！



隊長 土谷めぐみ (経済学部3年生) | 衣笠友美子 (産業社会学部2年生) | 藪 英季 (国際関係学部4年生) | 福島悠子 (文学部4年生) | 宮本泰成 (政策科学部1年生) | 斎藤友樹 (法学部2年生)

教育 新しい学際領域を切り開く学びが夢実現の原動力



これからの社会で強く求められる複眼的な思考・発想ができる人材の育成を目指し、文系と理系の垣根を取り払った画期的な学際教育プログラムである文理総合インスティテュート。「ファイナンス」「環境・デザイン」「サービス・マネジメント」の3分野から、産・官・学の連携実践のカリキュラムを重視し、実地体験を通じて学びを深め、社会でいきる実践力を養う機会を提供しています。そんなインスで学習する経営学部サービス・マネジメントインス4年生、東優子さんにお話を伺いました。

東 優子 さん (経営学部サービス・マネジメント・インスティテュート4年生)
 昭和女子大学附属昭和高校出身。経営学部石崎祥之教授のゼミで国際観光論をベースに学ぶ。「旅行療法とその可能性について」をメインテーマに研究を進めるかたわら、インターンシップ支援NPOでも活動に参加。現在は内定先の(株)ファーストリテイリング(ユニクロ)でアルバイト兼研修中。

高校時代、アルバイトでの接客経験からサービスに関わる仕事に興味を持った東さん。「お客さんが喜んで、また来たいと思えるサービスを提供したい。それに、自分たちがインスティテュートという新しいシステムを作り上げることに、わくわく、ドキドキして」そんな思いから、サービスを幅広く、かつ集中して学べるサービス・マネジメント・インスティテュート(以下、インス)へ。インスでの学びは、眼鏡専門店でのアルバイトにさっそく活かされた。「はじめは高いものを売りつけている気がして、お客さんは本当に満足しているのかと疑問でした。そんな時、授業で顧客満足論について学んだのです。お客さんは高額の商品を身につけていること自体に満足感を得ていることもあるとわかりました。「安くってラッキー」とはまた別の価値観もあるんだ、とサービスの奥深さに気づいた瞬間でした。」

インスの授業は基本的に少人数で行われます。単に講義を受けるだけでなく、学生同士、あるいは教員とコミュニケーションをとりながら授業を進められるので、「意見や疑問を率直に言い合える環境で、自然に勉強のモチベーションが上がりましたね。興味関心の幅も広がりました」と東さんは言います。他学部の学生との共同学習から学

んだことも。「例えば、経済学部の学生は統計データなどをきちんと用意してその数字から分析、考察を行うのでプレゼンテーションや意見に厚みがあり説得力がありましたね。」このことは、東さんにとって、具体的なデータにもとづいて論理的・戦略的にものごとを考えるきっかけとなったそうです。

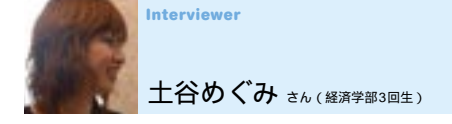


インスには民間企業や行政組織との連携を重視したカリキュラムが組まれており、「プロジェクト研究」もそのひとつ。東さんが参加したのは、京都府産業支援室と共同で「京都の産業活性化を目的に旅行と健康産業の融合の可能性」を研究するもの。京都にある健康分野の企業をいくつも訪問し、取材・情報収集を行い、報告書を産業支援室に提出。この研究は現在3回生に引き継がれ、

近々、取材した健康分野の企業を巻き込んで「旅行療法」として商品化される予定。「企業や京都府の方々やとりしたことで、いろいろな業界について研究できたし、社会人としてのマナーも身についたと思います。学生だから身軽に動けるし、学生ならではの視点で大胆な提案もできる。学生にとっても企業にとっても可能性を広げるチャンスだと思います。」

来春からは、販売の現場で経験を積むそうです。「会社色に染まり過ぎない、自分らしい接客を心がけます。サービスには正解がないですから。毎回状況も違えば、お客さん一人一人のニーズも違う。だからおもしろいんですよね。毎日が発見と自分磨きの連続だと考えています。」と社会人への抱負も十分。さらにその先も見据える。「いつか自分の店を持ちたい、その夢のために社会で何が学べ、それをどう活かせるかを考えています。」

東さんからはインスで学んだサービスの知識を実践し、培ってきた自信で、夢を形に変えようとする意志が強く感じられました。



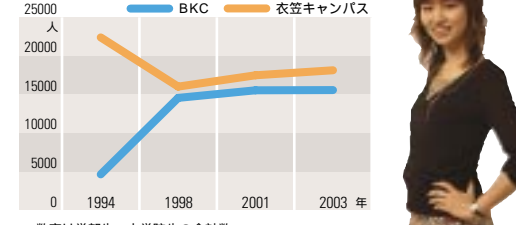
Interviewer 土谷めぐみ さん (経済学部3年生)

コラーニングハウス



2003年4月、BKCのコラーニングハウス南側に「コラーニングハウス」が新設されました。ここには、BKCの高速ネットワークを基盤とした多彩な設備が設けられ、3階の1フロアは文理総合インスティテュートの専用施設となっています。プレゼンテーションやプロジェクト研究のための設備をはじめ、各インスティテュートのゼミ研究室など、学生が自由に活用できる学習スペースが多数あります。学生間の積極的な交流と研究活動の高度化をバックアップする、文理総合インスティテュートの学びのスペースです。

キャンパス別学生数推移



研究 世界で唯一の研究拠点で身につけた自信が社会を生き抜く財産



「21世紀COEプログラム」とは、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進することを目的に文部科学省が推進するプロジェクトです。本学では、これまでに4件の研究拠点が採択されました。このプロジェクトは、研究推進の他に若手研究者養成も目的としています。最先端の研究拠点で大学院生はどんな力をつけているのでしょうか。「放射光生命科学研究」に参加している杉原さんにお話を伺いました。

杉原義人 さん (理工学研究科物質理工学専攻博士課程前期課程2年生)
 大阪府立高津高等学校出身。理工学部電子情報理工学卒業後、理工学研究科へ進学。研究に打ち込む傍ら、学部時代から放射光取扱主任者や危険物甲種取扱主任者などの資格取得に励む一面も。

杉原さんは大学入学時から、放射光など新しい光の可能性に注目していました。「まだ確立されていない放射光分野の、誰もやっていない新しい研究に取り組みたい」と、電子情報理工学の山田廣成教授の研究室に志願しました。山田教授は、X線や遠赤外線などの放射光を発生させる超小型シンクロトロン「みらくる」の開発者です。山田教授は装置の小型化、改良を飛躍的に進め、開発された世界で唯一の装置である「みらくる」などを用いて、新しい医療、生命モデルの提唱、新たな生命概念の確立を目指しています。



杉原さんの研究テーマは「マイクロトロン」の電流増強計画。マイクロトロンとは、シンクロトロンに放射光を入射する前の段階で、電子を発生させ加速させる加速器のことです。カーボンナノチューブという新素材の超微細構造に着目し、マイクロトロン電子源の研究を行なっています。電流の質・量を高めることでX線の強度が高くなり、レントゲンや非破壊検査を行なう場合の被爆時間を短くすることができるそうです。

COEの研究拠点には公的研究資金が重点的に配分され、施設設備・人材の両面で研究環境が大きく前進しました。各分野のスペシャリストや共同研究企業からの研究者が、教員や専属研究員として多く参加し、院生は研究のアドバイスや協力がすぐに受けられる非常に恵まれた環境にあります。研究成果や方針について話し合うミーティングが毎週開かれ、メンバーから自分の研究について意見やアドバイスを受けることができる場面も。「スペシャリストの研究員の方は、指摘するポイントひとつとっても違うんです。僕達ならば、実際にシミュレートしなければわからないことも、打ち合わせの段階で仮説が立てられる。研究のスピードが違いますね。強力なブレインです。」

研究以外の面でも成長できたと、杉原さんは言います。「共同研究企業などの社会人と接する機

会も多く、定期的に研究報告書も作成して報告する場があるので、自分の行動に責任を持つ姿勢が身につきましたね。」また、放射光取扱主任者の資格を取得する上での知識を生かして、COEプロジェクトの研究に必要な放射光施設の設計から申請書の作成、文部科学省に対するヒアリングまでを任せられました。「学生でありながら、こうした役割を担ったことは、非常に貴重な経験でした。」と語り、自信をうかがわせました。

杉原さんは、来春から歯科レントゲン等の医療機器メーカーに就職し、実用的な技術研究に携わることになります。「研究員はゴールじゃないし、いずれ独り立ちしなければ」と語る杉原さんのベンチャーマインドは、自らも起業された山田教授仕込みのもの。これからの社会を生き抜くための財産だと感じました。COEプロジェクトで身につけた高度な専門的力を基盤に、これからも「誰もやっていない」分野を突き進んでいって欲しいです。



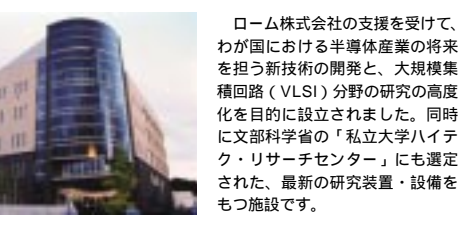
Interviewer 衣笠友美子 さん (産業社会学部2年生)

テクノコンプレックス



テクノコンプレックスは本学の産官学交流の象徴となる中核研究拠点として発展してきた施設。ハイテクリサーチセンター、ロボティクス・FAセンター、マイクロシステムセンター、SRセンター、産学連携ラボラトリなどの施設が有機的に結合したもので、キャンパスのサイエンスパークを目指しています。

立命館大学ローム記念館



ローム株式会社の支援を受けて、わが国における半導体産業の将来を担う新技術の開発と、大規模集積回路(VLSI)分野の研究の高度化を目的に設立されました。同時に文部科学省の「私立大学ハイテク・リサーチセンター」にも選定された、最新の研究装置・設備をもつ施設です。



土谷隊長による解説付き

BKCのあゆみ



キャンパス開設前の様子（中央の森林部分が現在のBKC）

BKC開設
理工学部・理工学研究科 BKCへ拡充移転
理工学部に生物工学科、環境システム工学科を設置
理工学部情報工学科を改組・拡充し、情報学科を設置
総合理工学研究機構（研究センター群）を設置

1994（平成6）年

滋賀県・草津市の公私協力で、BKCは産声をあげました。広さはなんと甲子園球場の約16倍！

産官学連携が重視され、企業からの受託研究や共同研究が飛躍的に発展したんだって。

1996（平成8）年

理工学部に光工学科、ロボティクス学科を増設
SRセンター開設
ハイテクリサーチセンター開設
産学連携ラボラトリー開設



SRセンター

経済・経営学部BKCへ移転 新展開
文理総合インスティテュート開設
社会システム研究所開設
経営戦略研究センター開設
ファイナンス研究センター開設
学術フロンティア共同研究センター開設

1998（平成10）年

BKCのコンセプトのひとつ“文理融合キャンパス”の幕開けです。

国際化 世界の学生が集い広がる研究ネットワーク



立命館大学では、現在540名の留学生が学んでおり、BKCには衣笠キャンパスを上回る、338人が留学生生活を送っています。なかでも大学院では、国際化の一環として留学生に英語で授業を行なうプログラムが整備されてきています。経済学研究科では2002年度からJICA（国際協力事業団）に協力してJDS留学生（途上国の留学生に対する無償支援事業）の受け入れを開始し、2002年度には2カ国4名、2003年度には4カ国10名を受け入れました。今回は、JDS留学生の一期生でもある、アレフィン・ムハマッド・サムスルさんにお話を聞きました。

Arefin Md. Shamsul さん（経済学研究科博士課程前期課程2回生）

1993年バングラデシュ・ダッカ大学大学院修了。バングラデシュの財務省行政官を経て、2002年9月、立命館大学大学院経済学研究科へ入学。

アレフィンさんが母国であるバングラデシュから来日したのは去年の夏。アレフィンさんはバングラデシュの財務省で働く行政官であり、職務を遂行する上で必要な経済学を学ぶために留学しました。現在は、WTO（世界貿易機関）の自由化政策が途上国に与える影響について、研究を進めています。「WTOは途上国の経済を解放し、グローバルイゼーションを推進させる国際機関の一つであり、バングラデシュも当然のようにその政策の影響を受けています。WTOの存在が途上国に与える利益と不利益の両方を、財務省で働く者として知る必要がありました」。アレフィンさんは、財務省の主税局で税収に関わる仕事をしており、特にWTOが国内の税体系に与える影響について

詳しく研究し、その成果を母国での職務に生かしたいと話してくれました。

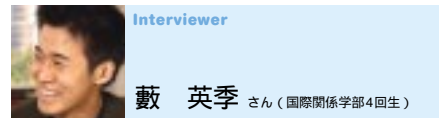
これまでは、留学生が入学する条件として、ある程度の日本語能力が必要でした。授業も基本的には日本語で実施されるものを受講しなければなりません。しかし、アレフィンさんの所属する経済学研究科に先駆け、2001年9月からは理工学研究科前期課程に留学生専用の国際産業工学特別コースが設置されるなど、すべての授業を英語で履修することのできるしくみが整備されています。このことによって、日本語がわからなくても、様々な国籍の様々な目的を持った留学生がキャンパスで学ぶことが可能となったのです。

授業や研究以外でも、「留学生活で学んだものは計り知れない」と話すアレフィンさん。特に、日本人の真面目な仕事ぶりに驚かされたと言います。「スーパーやコンビニに行っても本当に皆、真剣に、それでいて楽しそうに仕事をしている。バングラデシュではなかなか見られない光景です。帰国後はそのような日本人の良さを伝え、広めたいです」。一人一人の仕事に対する真摯な取り組みが国の経済力を上げ、更には一人一人を幸せにしていると実感したそうです。

アレフィンさんは来年には修士号を取得し、そ



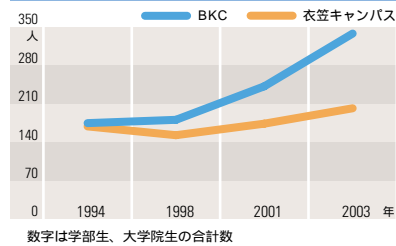
の後は再びバングラデシュで行政官に復帰する予定。将来、祖国を豊かにするという大きな夢を抱く一方で、またいつか大学に戻ってき勉強したいという思いもあるそうです。「仕事に活かすための学問も必要ですが、自分自身の人生を肥やすための学問は一生続けていきたい」。今回のインタビューで、アレフィンさんからは、自らをスキルアップさせるために学びつづけることの大切さを教えてもらった気がします。



Interviewer 藪 英季 さん（国際関係学部4回生）

BKCのほうが、衣笠キャンパスより留学生がたくさんいたなんて、びっくり！

キャンパス別留学生数推移



理工学部に新3学科が誕生します！

2004年4月、理工学部に「電子情報デザイン学科」、「マイクロ機械システム工学科」、「建築都市デザイン学科」を新たに開設します。これら3学科はエンジニア・研究者の社会的ニーズが高い分野を中心に、科学技術のフロンティアを開拓するために生まれました。「電子情報デザイン学科」では、VLSI（大規模集積回路）技術の一層の高度化と振興を

図るため、人材育成、新たな研究開発の展開、産官学連携、技術者交流の促進等をめざします。「マイクロ機械システム工学科」はマイクロナノマシンを駆使して科学技術・産業の未来を開拓するエンジニアを育成します。「建築都市デザイン学科」は従来までの建築デザイン領域と都市デザイン領域のより密接な融合をはかり、建築や都市のデザインに関する新

情報化 21世紀をリードする情報科学技術者養成の拠点に



2004年4月、理工学部情報学科の教学をさらに発展させるものとして、「情報理工学部」が開設されます。情報システム学科、情報コミュニケーション学科、メディア情報学科、知能情報学科、生命情報学科の5学科から構成され、計算機科学、情報ネットワークといった高度情報化社会を支える情報基盤技術から、メディアテクノロジーやヒューマンテクノロジー、バイオテクノロジーと融合した情報応用技術などについて学ぶことができます。新学部には、これまでのBKCのどのような成果が生かされているのでしょうか。学部長予定者である理工学部の飯田健夫教授にインタビューしてきました！

飯田健夫 教授（情報理工学部学部長予定者）

理工学部ロボティクス学科教授。現在の専門分野は人間工学。研究テーマは人間の情報処理特性に基づくヒューマンインタフェース設計の研究。通産省の生命工学工業技術研究所から1994年本学へ。趣味は絵画、スキー、最近は琵琶湖でカヌー。

飯田教授は、「情報化社会の進展とともに『情報科学技術』が生活の場に広く浸透し、今や社会的基盤となっています。また、医療福祉やバイオテクノロジーといった重要課題とも結びつき、『情報科学技術』を活用できる人材育成が必要不可欠になってきています。単に知識を集積するだけでなく、『ものづくり』を通して専門知識を習得することを特色としたカリキュラムで、高い目的意識と創造性を持った学生を育てたい」と意気込み十分。

この理念は、情報理工学部の多彩なプログラムに反映されています。例えば、企業からの講師派遣を実施し、現場の「生」の声を教育の場に持ち込むことで、学生は「社会が今、何を求めているのか」という事を肌で感じる事ができるのです。



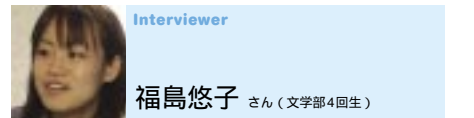
またインターンシップ等の実習も重視され、教育システム自体に組み込んだ「実験・実習科目」が準備されています。「学生も、学んだことが『ものづくり』の現場でどう役立つかが理解できれば、非常に有効な学びのモチベーションとなるのです」と、飯田教授は言います。

情報理工学部は、「世界で活躍する技術者養成」も目標とされ、共通専門科目などを英語で受講できるプログラムが組まれています。キャリア養成科目では、目的別にBKCの3学部とも相互に補完できるように配慮されています。また、教員が課題を与えるだけでなく、授業の進め方から内容まで、学生の手で作り上げる「ものづくり創成科目」「研究プロジェクト科目」を設置し、独創性や実践力を養う工夫がなされています。

立命館大学では、産官学連携の取り組みを推進してきました。特に、理工分野においては、超伝導放射光源発生装置を有したSRセンターやテクノコンプレックス等共同研究の拠点となる施設、レンタルラボなどを設置し、企業との連携を進めてきました。加えて、経済、経営、理工学部の学際領域を切り開いてきた文理融合の試みも、情報理工学部として新たな学問領域を発展させるベースとなってきたのです。

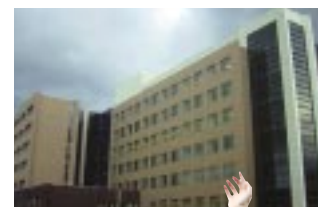
飯田教授は、「BKCの10年間の教育・研究成果の蓄積は、オリジナリティ溢れる情報理工学部のカリキュラムにも生かされています。今後はBKCで培ってきた成果で、社会貢献を進めることが重要です。私は、それが本学の使命だと考えています。本学の新たな教学とその成果を、どんな世の中に示していきたい」と語って下さった。

研究分野は、コンピュータの基本・しくみを学ぶものから、ユビキタスのように情報をネットワーク観点から捕らえたもの、人工知能研究、音声・画像・文字など様々な情報媒体に迫るもの、バイオや生命科学に関わるものなど、実に幅広い。ここで培われた技術を生かせば、例えば、人間の会話を理解できるロボットやアレルギーを根治できる治療法の開発など、困難な技術も現実のものとし、学生が自分自身の手で科学の未来を切り開いてゆける「可能性」と「夢」が秘められています。どんな人材や技術が育つのか、今からワクワクします。情報理工学部の挑戦に、これからも注目していきたいです！



Interviewer 福島悠子 さん（文学部4回生）

情報理工学部新棟



情報理工学部の基本施設は、リンクスクエアの南側に現在建設中です。施設は地上7階建てで遠隔講義施設等、学部としての特色を打ち出した施設として整備される予定です。研究室については、担当教員の指導のもとで、学部生と院生がひとつの研究室に集結して研究を進められる環境を整備します。

理工学部 数学物理学科を改組して数理科学科・物理科学科を設置
理工学部 化学科を応用化学科、生物工学科を化学生物工学科に名称変更
立命館大学ローム記念館設立
VLSIセンター開設

社会のニーズをふまえ、
大学院教育も
充実しています。

大学院経営学研究科にプロフェッショナルコース設置
COE推進機構を設立

2000 (平成12)年



2001 (平成13)年

理工学部光工学科を電子光情報工学科に名称変更
大学院理工学研究科フロンティア理工学専攻を設置
エポック立命21(セミナーハウス)を設置

2002 (平成14)年

理工分野の研究蓄積が、
計4件の21世紀COEプログラム
採択にも結びつきました。



2003 (平成15)年

放射光生命科学センター開設
歴史都市防災研究センター開設
コーニングハウス を設置

2004 (平成16)年

来年度には新しい学部、学科が誕生！
BKCの今後の発展が
ますます楽しみです！



課外自主活動 挫折も乗り越える精神力で走りつづきたい



体育会陸上競技部は、男子、女子とも活動の拠点をBKCに置いています。11月16日の関西学生対抗駅伝で38年ぶりの優勝を飾った男子に続き、11月23日に行なわれた全日本大学女子駅伝で、女子も悲願の初優勝を果たしました。本学の課外自主活動の新たな力を全国の人々に見せてくれたのです。優勝の立役者、池田恵美さんに話をうかがい、BKCで培われた「強さの秘訣」について紹介します。

池田恵美 さん(立命館大学女子陸上競技部)

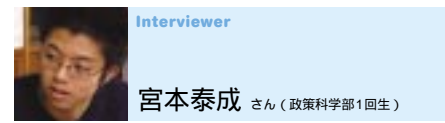
経営学部サービス・マネジメント・インスティテュート2年生。中学時代から陸上部に所属し、実力をかわけ立命館宇治高校に入学。インターハイ1500メートルで高校新記録、高校駅伝優勝など着々と実力をつけ、現在は日本学生対校選手権1万メートルで大会新記録、2003年ユニバーシアードへの出場など、本学女子陸上部のエースとして活躍する。

「小学生時代から走ることに魅力にとりつかれていた」と語る池田さん。マラソン大会に向けての練習はワクワクしてたまらなかったと言います。小・中学校とは異なり高校時代での陸上は、彼女にとって一つの試練であり、貴重なものでもありました。全国でもトップレベルのアスリートが集まる立命館宇治高校で、最初は練習についていだけで必死だったそうです。しかし、先輩や仲間を支えられて、今日まで乗り越えてきました。彼女の精神力の強さは並大抵のものではありません。「陸上を辞めたいと思ったことは一度もありません。毎回、この厳しい山を越えてやるという気持ちで挑んでいます。」この言葉を語る表情に、スポーツ選手らしい闘志を感じます。潜在的に備わっている何事にも物怖じしない精神力と努力を積み重ねて勝ち取った自信が、強さの原動力となっているのではないのでしょうか。高校時代の環境は、陸上人生の基礎となる体力・精神力を養ってくれたと振り返ります。



BKCの設備や環境が彼女の活躍を後押ししている面もあります。400メートルの規模を誇るトラックを有するクインスタジアム、トレーニングルームといった申し分ない環境で練習を出来るのが良い結果につながっている、と池田さんは話します。また、大学でのトレーニングに加えて、週に何回か高校時代の監督が引き続き指導を行ってくれることも評価していました。このように、学園が一体となって学生の活動を応援する

ことは素晴らしいと感じました。目標とする選手はいますが、という質問に「時代は変わるので一人の選手を目標とはしない、あえて言うならその時に一番強い人を目指します」と心強い言葉を残してくれました。彼女の先輩にあたる千葉真子選手のように、「挫折を経験してもあきらめない気持ち」を常に保ち、将来も陸上を続けたいという意志をはっきりと見せてくれました。来年の1月11日に行なわれる都道府県対抗女子駅伝は、彼女の成人式にあたり、自分へのお祝いとして区間賞をとるため、練習に励む日々が続きます。池田さんは、レース中の真剣な表情からは想像できない和やかな人柄でした。しかし、「勝利への執念」「1番へのこだわり」を見せる姿を見ると、勝負の世界に生きる人なのだと実感します。同じ学生として、彼女の頑張る姿に刺激を受けました。心から応援したいです、頑張れ！！



Interviewer

宮本泰成 さん(政策科学部1年生)

課外自主活動 授業とサークルの両面からロボット作りを極める



理工学部ロボティクス学科は、1996年に開設された、全国でも珍しいロボット科学技術に特化した学科です。こうした理工学部の教学と結びついた課外活動に、「BKCプロジェクト団体」があります。なかでも、「ロボット技術研究会」は、今年はNHKロボットコンテストでベスト8に入賞するなど、日々の努力で成果を上げています。そこで今回は会長の大西さんにロボットづくりの魅力について聞いてきました！

大西 潤 さん(BKCプロジェクト団体「ロボット技術研究会」会長)

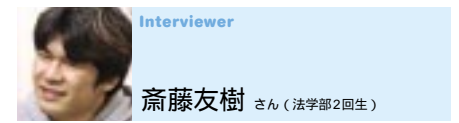
理工学部ロボティクス学科3年生。兵庫県西脇高校出身。1回生の時からロボット技術研究会に所属し、NHKロボットコンテストや国際マイクロロボットメイズコンテストなどに参加。3年生からは会長を務める。

「ラジコンみたいに車輪で進むベーシックなロボットは見たことがあると思いますが、僕らのロボットは一味違います。楕円形に組まれたアームが倒れて転がりながら進むロボットは反響が大きかったですよ」とロボット作りの楽しさについて語るのは、ロボット技術研究会会長の大西さん。「授業ではロボットを作る機会が限られているので、実際に作ることが出来る貴重な場です。」と語るように、「理論を実践する」醍醐味がロボット技術研究会にはあるようです。「文献や授業で学んだ技術で、試行錯誤しながらロボットを完成させます。なかには完成までに1年近くかかるものも。実際に動かしてみても、動いたときの感動はすばらしいもの」と大西さんは目を輝かせます。スイッチを入れても動かない、という事もしばしばですが、最初は原因が分からなくても、授業で「なるほど」と理解が深まる場面も。基礎的な理論や技術を学ぶロボティクス学科と、楽しみながら実践できるロボット技術研究会。まさに両者の結びつきでロボットへの興味、そして学びが深まっているのだ、という感じがします。ロボット技術研究会はいくつかのコンテストにも出場しています。「毎年ルールが変わるので



苦勞します」というNHKロボコンには「今年は勝ちを狙った」ロボットで見事ベスト8に入賞しました。2002年には楕円形ロボットでデザイン賞を受賞。「タイムを競うだけでなく正確に動くことが一番だけど、同じ作るならユニークでオリジナリティのあるもの」というコンセプトで製作したそうです。大西さんは取材の際、他のコンテストのために作ったサイコロほどの大きさのマイクロロボットを見せてくれました。コンテスト以外でも様々な活動をしています。学園祭ではロボットを展示したり、京都市の青少年活動センターなど、地域からの要請でロボット工作教室を開催することも。工作教室の対象は小学生など小さい子供たち。子供にも分かりやすい説明の仕方や子供でも作業できるよ

に工作を簡略化するにはどうしたらいいかなど、運営面では苦勞もあるそうですが、彼らの熱意が伝わって教室の参加者からは毎回好評です。ロボット技術研究会はロボティクス学科だけでなく、機械システム系や電気電子・光系など、他の学系の人も所属しています。専門や興味、関心の違う人が共に活動することで様々なアイデアに繋がっていくのは、サークルだからこそ、と言えるでしょう。興味本位で作るだけでなく、学部での学びを実践してさらに学びを深める事ができるサークルなのです。同じ事を考える場合も、最初の切り口は十人十色。ユニークなアイデアもあればとても合理的で実用的なアイデアもある。アイデアと各分野の技術が組み合わせられて、さまざまなロボットが生み出されるのです。学生同士が化学反応を起こせることがロボット技術研究会の魅力であり、BKCの魅力にもなっているのではないのでしょうか。



Interviewer

斎藤友樹 さん(法学部2年生)

BKCでも課外自主活動の参加者が年々増えているんだって。地域交流も盛んだそうです！

BKCの課外自主活動の状況

BKCでは、7,214名(キャンパス在籍者数の52.6%)の学生が、クラブ・サークルなどの課外自主活動に参加しています。BKCでは「地域密着」というキャンパスコンセプトのもと、学生が企画し地域住民や社会と連携・共同した取り組みも広がっています。学芸サークルの「草津宿場まつり」への出演や、近隣の小学生を対象に開催した科学体験教室・「立命の家」など、この4年間の交流件数は478件にものぼります。



クインスタジアム



フットボールグラウンドと全天候型陸上競技場トラック8コースを兼ね備えています。男子・女子陸上競技部の練習の他に、フットボール系の招待試合なども数多く行われており、今や立命館を代表するグラウンドになっています。BKC内にはこの他に第1・第2グラウンドがあり、アメリカンフットボール部とラグビー部が主に活動しています。

エポック立命21



2001年、セミナーハウス「エポック立命21」が完成しました。多様なスタイルで行われる教育や学生の諸活動に活用できるよう、多目的ホールや体育系クラブの強化合宿にも対応する施設を併設し、クラス・ゼミ・研究室・サークル・クラブなどでの交流・親睦を深める場として利用されています。

今後のBKC開設10周年記念イベント

- 2003年 12月16日(火)..... 第3回企業トップ連続公開講演会
 - 2004年 4月24日(土)..... 情報理工学部開設・BKC開設10周年記念式典
 - 2004年 5月中旬..... 学生ベンチャープランコンテスト
 - 2004年 6月6日(日)..... くさつフェスティバル in BKC(仮称)
- *スタンプラリー「そうや！BKC10周年にいこう！」も開催中！

BKC開設10周年ホームページ
<http://www.ritsume.ac.jp/mng/cm/sokan/bkc10/bkc10.html>